

第2章 寒河江市の教育を取り巻く現状と課題

1 第2次寒河江市教育振興計画の成果と引き継ぐべき課題

平成28年度に策定し、令和2年度に中間見直しを行い、令和7年度に目標年度を迎えた「第2次寒河江市教育振興計画」は、その施策を展開する中で次のような成果が見られました。

- ◎市内全ての小中学校がコミュニティ・スクールとなり、学校・家庭・地域との連携が推進され、ふるさとに対する愛着心の醸成やキャリア教育の充実、豊かな心と健やかな体づくりにつながっている。
- ◎中学校区ごとの小中連携が充実し、発達段階を踏まえた一貫性のある継続的な指導が行われている。
- ◎小中学校給食費の完全無償化や市内外の小中学校等へ通学する児童生徒の給食費の補助など、保護者の負担軽減策が講じられている。
- ◎小中学校へのエアコンや気化式冷風機、1人1台端末や電子黒板、校内無線LAN環境等が整備され、教育環境の改善が図られている。
- ◎「寒河江さくらんぼ大学」の継続開催や、街を芸術で彩った「SAGAEまちなか芸術祭」の開催、若者を対象にした音楽イベント「SAGAE MUSIC DAY」の開催等により、芸術文化振興の成果が見られる。
- ◎市民の自主的な学びへの支援により、生涯学習の広がりが見られている。
- ◎読書講演会をはじめとした魅力ある読書普及活動や、軽自動車による移動図書館「LiBOON」の活用によるアウトドアサービス等により、読書活動の推進が図られ、市民の自主的な読書活動の広がりにつながっている。
- ◎「“さがえ”さくらんぼマラソン大会」や「寒河江さくらんぼウォーク」、「ツール・ド・さくらんぼ」など、スポーツ関連事業が展開され、地域の活性化につながっている。
- ◎生涯スポーツの振興とともに、子どもや若い世代が楽しめるアーバンスポーツ等の振興が図られている。

このように、第2次市教育振興計画は多くの成果を上げていますが、次の点は今後に引き継ぐべき課題となっています。

- ◇「読解力」の育成を通した学力の育成
- ◇「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善
- ◇「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けたICTの活用
- ◇いじめや不登校など、生徒指導上の諸問題への早期対応・継続支援
- ◇学びや生活の基盤をつくる幼稚教育と小学校教育の円滑な接続
- ◇コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進
- ◇コミュニティ・スクールを活かしたふるさと教育や、地域の企業・団体と連携したキャリア教育・ものづくり教育など、寒河江市らしい特色ある教育の一層の推進
- ◇地域の実情と将来を見据えた学校の再編整備

- ◇学校部活動の地域展開の推進
- ◇地域住民が行う自主的な学びの活動や世代間交流事業などへの支援
- ◇幅広い芸術文化の提供と支援
- ◇アーバンスポーツの一層の振興やスポーツツーリズムを通した交流人口の拡大
- ◇将来を見据えた組織やスポーツ環境等の整備
- ◇文化施設や体育施設の計画的な整備と修繕

2 教育を取り巻く社会的な課題

(1) 少子高齢化に伴う人口構造の変化に応じた教育の創造

現在の我が国の生産年齢人口である15～64歳の人口は、2050年には現在の3分の2に減少すると推計されています。令和7年12月31日現在で38,785人である本市の人口も、「寒河江市人口ビジョン」によると、10年後の令和17年には35,896人に減少する見込みとなっています。少子高齢化による人口減少がさらに進み、児童生徒数についても減少傾向が続くものと見込まれており、学校の役割と将来の児童生徒数の推移、適正規模・適正配置等を踏まえた学校施設の整備を進めていく必要があります。

加えて、長寿化の進展により迎えようとしている「人生100年時代」を見通して、生涯を通じて豊かに生きるための学びの継続や、生涯にわたる学習の仕組みづくりも重要となります。

(2) 幸せや生きがいなど 精神的な豊かさを重視した社会の創造

経済先進諸国においては、GDPに代表される経済的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさや健康までを含めて幸せや生きがいを捉える考え方が重視されてきています。OECD（経済協力開発機構）の「Learning Compass 2030（学びの羅針盤2030）」では、個人と社会のウェルビーイング（身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念）は「私たちが望む未来」であり、社会のウェルビーイングが共通の「目的地」とされています。

教育を通して子どもたち一人ひとりが幸せや生きがいを実感するとともに、そのような環境を保護者や地域の人々とともにつくりしていくことで、教育に携わる人々の中にも幸せや生きがいの実感が高まり、その広がりが一人ひとりの子どもや地域を支え、さらには世代を超えて循環していくという社会の在り方が求められています。

(3) 社会の持続的な発展に向けて 学び続ける人材の育成

先行きが不透明で予測困難な社会の中で、一人ひとりが幸せや生きがいを実感できるようにするためには、この社会を持続的に発展させていく必要があります。こうした社会を実現させていくために必要なのは「人」の力です。日々進化し続けるAIの技術も活用しながら、新しいものを創り出す創造力や、他者と協働しチームで問題を解決する能力が今後一層求められており、これらの能力を育成するにあたり、教育が大きな役割を担っています。

急速に変化する社会に対応しながら、社会を持続的に発展させていくためには、新しい知識やスキルを習得し、既存の概念をアップデートしていくことが求められます。個人が積極的に学び続け、社会全体でその学びを支援する環境を整備することが、社会の持続的な発展には不可欠です。

(4) 教育分野における DX（デジタルトランスフォーメーション）の推進

DX とは、経済産業省が「データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること」と定義した言葉です。近年では教育分野においても、デジタル技術を活用した教育を行うことを通して、教育の在り方や教育手法等の変革を行うことを意味する言葉として使用されています。

コロナ禍で国の GIGA スクール構想の取組みが加速し、学校内のネットワーク環境と 1 人 1 台端末が一気に整備され、学校や家庭での学習で 1 人 1 台端末が日常的に活用されるようになりました。今後は、ICT や教育データを効果的に利活用し、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていくことが求められています。

さらに、教職員の業務負担を軽減し、子どもたちと向き合う時間を創出することで教育の質を向上させることにつなげるために、校務における DX の推進も求められています。

また、生涯学習・スポーツ振興分野においても、各種申請等を電子化していくことなど、業務の DX を推進していくことが求められています。

3 現状と課題を踏まえた教育の創造

このように、第 2 次市教育振興計画に基づく施策は多くの成果を上げてきた一方で、引き継ぐべき課題も浮き彫りとなり、教育を取り巻く新たな社会的課題への対応も必要となっています。

変化が激しく、将来の予測が困難な時代を生き抜くためには、新たな視点から物事を見つめることも大切です。課題をマイナスに捉えるだけでなく、見方・考え方を変え、課題を逆手に取りプラスに思考をすることで、よさを引き出し、新たな取組みにつなげることも考えられます。そのような思考や経験を積み重ねることで、自分が取り組んできたことが困難であったり、うまくいかなかつたりしても、そこから立ち直って新たな解決方法を考える精神的な強さも身に付けていくことができるものと考えます。

また、ワクワク感や好奇心が人を学びに向かわせる大きな原動力にもなることから、情意面からも学びを支え、生涯にわたって学び続ける人を育てていくことも大事であると考えます。

このように現状と課題を踏まえつつ、これから社会をたくましくしなやかに生きる力を育む教育を、市民みんなで創造していくことを目指していきます。